

観光教育実践におけるアクティブラーニング

高山啓子*

Active Learning in Practical Tourism Education

Keiko TAKAYAMA

要 旨

本稿は、観光教育におけるアクティブラーニングの意味とその実践方法について考察している。第一に、大学教育全般においてアクティブラーニングが求められる中で、特に観光教育はその研究対象である観光という分野の特徴からも、アクティブラーニングの効果が期待されており、実際にさまざまな取り組みが実施されていることを明らかにしている。観光教育の中では、教室の授業内で行われるアクティブラーニングだけでなく、観光地、観光産業といった多様な観光の現場での実態を理解するために、直接現地に訪れて行うフィールドワークやプロジェクト活動は重要であり、現在、多くの観光教育においてそうした取り組みが行われている。また観光地の活性化等にとっては観光情報の発信も重要であり、フィールドワークによって得られた情報を発信するための加工編集もアクティブラーニングのひとつとして実施することが観光教育には求められている。第二に、観光分野におけるアクティブラーニングの実践例として、「観光文化実践」という授業の取り組みを取り上げている。これにより、観光教育におけるアクティブラーニングの具体的な方法の一例を示している。

キーワード：観光教育、観光情報、フィールドワーク、アクティブラーニング

1. はじめに

近年、大学教育全般において、アクティブラーニング（能動的学修）が求められる中で、大学の観光教育においてもアクティブラーニングは必須のものとして実施されている。しかしアクティブラーニングと一言で言っても、その具体的な内容、手段、目的は多様である。そうした中で、アクティブラーニングのどのような側面が観光教育にとって必要とされているのであ

*教授 社会学

ろうか。観光教育は観光学を中心とした観光に関する様々な現象を扱う学問を基にして行われるものであるが、その特徴は、実際の観光地、観光業、観光行動と切り離して行うことはできないということである。つまり観光教育にはそうしたさまざまな観光の現場（フィールド）のフィールドワークが求められるのである。なぜなら観光の現場というのはそれぞれが異なっており、統計調査だけではその多様で具体的な実態は捉えきれないからである。

本稿では、まず大学における観光教育を実践する上で、どのようなアクティブラーニングが実施可能であるのか、観光教育の特徴を踏まえて明らかにする。さらにフィールドワークによる調査だけでなく、観光における情報発信の重要性を考慮すると、観光地などについての観光情報発信に関する教育も重要であるため、観光情報教育のアクティブラーニングの意味と具体的方法について示していく。最後に観光教育におけるアクティブラーニングの実践例として、川村学園女子大学観光文化学科における実践の科目である「観光文化実践」におけるアクティブラーニングの具体的内容と方法、観光情報発信のための情報収集、編集、加工の実施状況と実施例をあげ、観光教育におけるアクティブラーニングの意義と課題について検討する⁽¹⁾。

2. 観光教育とアクティブラーニング

(1) 大学教育におけるアクティブラーニング

近年の大学教育においては、平成24年の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会, 2012)を受けて、学生の主体的学びを実現するための取り組みが必須となっている状況である。この答申の中で、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材育成のために「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」と述べられている。具体的にアクティブラーニングとしてこの答申の中では「個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業」が示されている。さらに同答申の用語集において、アクティブラーニングには「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と述べられている。このようにアクティブラーニングとは主体的、能動的に学ぶという意味ではあるが、その方法は多

様であることがわかる。

こうした大学におけるアクティブラーニング教育の方法はどのような類型化がなされているのであろうか。大別するとひとつは教室内で行われる講義や演習授業の中で行われるもの、もうひとつはPBL（Project Based Learning / Problem Based Learning）と呼ばれるようなプロジェクト活動を通して行われるものと捉えられている。前者では学生の知識の定着や理解を促すための教室の授業内でのディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションといったものがそれにあたり、後者はフィールドワークなどによって行われる（山地，2014）。こうしたアクティブラーニングの方法は、授業の内容、講義であるか演習であるかといった授業のタイプ、その授業での到達目標、学生の経験や知識によって、何を選択するか当然異なってくる。それでは大学での観光教育という分野においては、どのようなアクティブラーニングの方法を取りうるのだろうか。

(2) 観光教育におけるアクティブラーニングの意味

大学における専門課程教育としての観光学は、観光に関する様々な現象を対象としており、また研究方法も多様であるが、共通しているのは観光地、観光産業といったフィールドや人間の実際の観光行動と切り離すことのできない学問領域であるということである。もちろん教室における講義や演習で観光現象に関する基礎的な知識を身につけ、深く理解することは前提にあるため、前述したような教室の授業内でのディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングは当然行われる。しかしそれに加えて観光学という学問領域の特徴を踏まえると、学生がこうした観光に関するさまざまな現象を理解し、考察するためには、フィールドワークやプロジェクト活動を通じたアクティブラーニングが効果的であると考えられる。実際に大学の観光教育の中では、フィールドワーク、学生のまちづくりや企業、自治体とのプロジェクトへの参加などが実施され、一定の効果をあげていると考えられている（中島，井口，2013）。

フィールドワークとは主に文化人類学や社会学で用いられる調査技法のひとつである。調査技法を量的調査と質的調査に分類した場合、通常フィールドワークは質的調査と捉えられる。質的調査は主に観察、参与観察、インタビューといった方法で行われる調査であるが、フィールドワークは必ずしもこうした方法のみで行われるわけではなく、フィールドで質問紙等を用いて統計調査を行うこともあり、質的調査法の一つというよりは特定のフィールドを調査対象として実際にそこに訪れる調査がフィールドワークと呼ばれていると言える（佐藤，2006）。このフィールドワークという調査技法が観光分野の調査にとって有益である理由は、観光に関

わるそれぞれのフィールド＝現場が多様であり、現場を訪れない統計調査で（全体の概要は捉えられるかもしれないが）具体的な実態は捉えきれないからである。そうした意味でも、観光教育において学生にフィールドワークの手法を身につけさせることは極めて重要であると考えられる。

近年、観光教育は大学の専門課程だけではなく、小学校、中学校、高等学校の教育の中でも取り組みが行われている。観光庁は小中高等学校における観光教育の推進をはかっており、小中学校では総合的な学習の時間において各地域の歴史や文化といった観光資源を理解し、関心を持ち、情報発信ができることを目指していること、また高等学校では新学習指導要領によって商業科で「観光ビジネス」科目が新設できることになったことを踏まえて、観光教育の現状についての調査を実施している（国土交通省観光庁観光産業課，2018）。この調査で観光教育の先進事例としてとりあげられている教育内容は観光を通じた地元の地理、歴史、文化の理解や情報発信などさまざまであるが、基本的な流れは＜座学→フィールドワークなどの実践的活動→活動のまとめレポートや観光マップ作成＞というように共通している。これらの教育事例は特にアクティブラーニングとは明記されていないものの、実際に行われていることはアクティブラーニングそのものであり、観光教育の実践においてアクティブラーニングが必須であることをよく示している。中でも注目したい点は、最終的な作業が単なる調査結果のまとめではなく、積極的な情報発信または情報発信を見据えた製作である授業が多いということである。このことは一般的な教育的効果のみならず、現在の観光教育で何が重要であるかということも意味している。

(3) 観光情報に関する教育とアクティブラーニング

観光地の活性化、観光関連事業の発展にとって、観光客に対する情報発信は重要であり、この重要性についてもさまざまな観光の場で認識されている。そのため観光客が必要とする観光情報を分析し、観光客のニーズにあった情報の加工編集、情報発信が求められている。というのも一般的な観光行動は、事前に目的地の観光スポットなどの情報を一切入手せず行われることはあまりないと思われるからである。観光客は、どこに行くか、目的地で何を見て体験するか、どのような食事をするか、土産として何を購入するかなど、出発前にも現地でも、さまざまな手段で情報を手に入れ、その情報を参考に行動する。現在の観光行動にとって観光情報は切っても切り離せないものであり、そうした情報の内容や形態も多様化している。

現在、観光情報の内容に関して観光客に必要な基本的情報（観光スポットや観光施設の料金、営業時間、アクセスなど）は変化していないが、それ以上の情報発信が重要視されている。そ

これは観光行動を誘引するための、観光地や観光スポットのイメージを形成する情報である（遠藤，2005）。観光に行く可能性のある潜在的観光客がどこに行くかを決めるときにまず影響を受けるのは、基本的な必要情報ではなく、比較的漠然としたその場所のイメージである。歴史がある、自然がある、絶景、食べ物がおいしい、エキゾチック、にぎやか、のんびり、というように具体的なものから抽象的なものまで、観光地のイメージ形成は観光行動の誘因となるものであり、観光地や観光産業は様々なイメージ形成のための情報発信を行っている。

一方、観光情報の発信形態、入手の手段に関しては非常に多様化が進んでいると言える。現在、観光情報の発信形態は、従来のメディア（ガイドブック、パンフレット、地図、ポスター、テレビCMなど）による情報に加え、インターネットを通じたデジタル情報が多く用いられるようになってきている。観光地の自治体、観光協会などは観光案内のウェブサイトを公開しており、旅行会社もさまざまな観光地や観光のしかたをウェブサイトで紹介している。さらにそうした観光地、観光業側だけでなく、観光客自身も旅行後、または旅行中にSNS等で観光情報を発信しているのが現代的な特徴である。このように観光行動に観光情報は不可欠のものであり、かつ多様化する情報発信形態への対応は、観光を学ぶ学生に不可避のものとなっている。そのためさまざまな内容の観光情報を把握し、どのような情報が必要とされているか（観光地側にも観光客側にも）を的確に捉えること、またそうした情報をどのように加工編集するのがよいのか判断し、ニーズにあった情報の加工編集をする技術も求められる。現在、情報の加工編集はPCソフトウェアを用いて行われることが一般的であるが、紙のパンフレットや地図の作成、デジタルパンフレットやウェブサイト作成など、目的によって異なっている。こうしたソフトウェアの利用は、使われるソフトウェアの移り変わりはあるものの、基本的な情報の編集作業を理解、実践しておくことは有効であると言える。

こうした観光情報の加工編集、発信を中心とした観光学のアクティブラーニングの実施により、学生はさまざまな地域、観光関連施設、宿泊施設などでの調査、プロジェクトへの参加、それにより得られた知見、情報を発信するという作業を通じて、理論をより深く学び、応用力を身に付けることができると思われる。

3. アクティブラーニングの実践例

(1) 観光文化学科におけるアクティブラーニングの実践

川村学園女子大学観光文化学科では、これまで10年以上にわたってフィールドワークを中心とした実践的教育を推進してきた。その内訳は主に正課科目（「観光文化実践」など）およ

び正課外活動（産学連携プロジェクトなど）における観光地、観光関連施設におけるフィールドワーク等の実践である。こうした実践の中では、フィールドワークの実施後、フィールドで収集した知見、情報を加工編集する方法、および観光情報として発信する方法を学び、身につける中で、学生の主体的な情報収集、考察、問題解決、情報発信能力の向上を目指してきた。

またこれらの教育の中では、観光情報の加工編集および情報発信として、フィールドでの観光情報収集後の情報整理、画像編集ソフトウェアによるフィールドの画像の加工編集、地図作成、パンフレットおよびポスター作成、インターネットでの発信を想定したウェブサイトおよびデジタルパンフレットの作成により、適切な情報収集、情報の加工技術、情報発信の各能力を身につけることを目的としている。こうした能力は観光、旅行産業、地域の観光まちづくりにおいて求められている能力であり、観光関連産業において期待される実践的人材の育成をも目的としており、観光インターンシップや企業や地域との連携プロジェクトにも活かしている。

(2) 「観光文化実践」におけるアクティブラーニング

現在、観光文化学科の授業科目として「観光文化実践」は、前期後期合わせて1年度中に11クラスが開講されている。その内容はフィールドワーク、プロジェクト活動、およびインターンシップであり、フィールドやプロジェクトの内容は各クラスによって異なっており、開講年度によってもどこをフィールドにするか、またプロジェクトの内容は異なっているが、いずれも観光のアクティブラーニング教育の実践を行っている授業科目である。履修年次は2年次以上であり、履修者数も5~20名程度とさまざまである。観光文化実践の授業において、アクティブラーニングの具体的な内容として想定されているのは、フィールドワーク、プロジェクト活動等であり、フィールドワーク等の結果のまとめ、および情報発信の作業としての1) フィールドでの情報収集後の情報整理、2) 画像編集ソフトウェアによるフィールドの画像の加工編集、3) 地図作成、4) パンフレット、ポスター作成、5) インターネットでの発信を想定したウェブサイトおよびデジタルパンフレットの作成である。

現在の観光文化実践の授業内で実際に行なっていること、その結果のまとめ方、作成時に使用するPCソフトウェア（アプリケーション）について担当教員に対して質問調査を行った。その結果は以下の通りである⁽²⁾⁽³⁾。

1. 観光文化実践の中で行なっていること（複数回答）

フィールドワーク 10クラス

観光教育実践におけるアクティブラーニング

地図・パンフレット・ウェブページ等の作成 4クラス

商品開発体験 2クラス

(その他……インターンシップ, 産学連携プロジェクト, セミナー参加)

2. フィールドワークの結果のまとめ方 (複数回答)

レポート 8クラス

プレゼンテーション 7クラス

製作物 (地図・観光ガイド・パンフレット等) 3クラス

(その他……グループディスカッション)

3. レポート, プレゼンテーション, 地図・パンフレット等の作成の際に使用する PC ソフトウェア (アプリケーション) を指定しているか

指定している 4クラス

指定していない 6クラス

この結果から観光文化学科における観光文化実践科目の特徴をあげると、ひとつの授業内でフィールドワーク, 地図・パンフレット・ウェブページ等の作成, 商品開発体験, その他の実践活動というように、複数の実践活動が行われているということである。またフィールドワークを行い、その調査結果をまとめる際にも、ひとつの授業でレポート, プレゼンテーション, 製作物, ディスカッションといった形で複数の課題が与えられている。レポート, プレゼンテーション, 地図・パンフレット等の作成には PC ソフトウェアを使用することは通常であるが、何のソフトウェアを使用するかは指定している授業と指定していない授業がある。指定している授業で使用されているソフトウェアは、ワード, パワーポイント, エクセル, マイクロソフトパブリッシャー, Adobe イラストレーター, 地理情報分析支援システム「MANDARA」である。指定していない場合も実際に使用されるソフトウェアは主にワード, パワーポイント, マイクロソフトパブリッシャーである。指定外の「CANVA」という無料ソフトウェアの使用の申し出を許可したというケースもあった。

このように観光文化実践の各クラスでは、フィールドワークやその結果をまとめるレポート, プレゼンテーション, 観光ガイドや地図等の作成といったアクティブラーニングを実施している。次に、こうしたアクティブラーニングをどのような手順で行なっているか、実践例を挙げる。

(3) 観光文化実践におけるアクティブラーニングの実践例

半期科目の「観光文化実践」において、アクティブラーニングをどのように実施しているか、その一例を挙げる⁽⁴⁾。例に挙げる「観光文化実践」はひとつの地域の観光まちづくりをテーマとしているが、いわゆる有名「観光地」ではない地域を対象としている。観光地ではない地域にどのような観光資源があるのか、観光客に対して何をアピールできるかを把握し、最終的に観光客に対する情報発信として観光案内やモデルコースを作成することを目的としている。インタビュー等を行わず、観察のみでフィールドワークを行う。

この授業では東京都内の調査対象地域1か所を4エリアに分割し、全15回の授業のうち各エリアを1回ずつ計4回訪れて観察を行う。授業全体の初回、2回目はフィールドワークの方法、対象地域の特徴、観光まちづくりの概要について説明を行い、調査項目や分担などを調整する。フィールドワークの前の回の授業ではそのエリアの観光資源、その位置等、必要情報を事前研究として報告し、実際に観察をして回るルートを話し合っで決定する。事前研究の中では観光スポット、歴史文化遺産、景観・町並み、商業施設、飲食店、イベントといった観光資源だけでなく、その地域の歴史、まちづくりの背景、自治体の政策・条例、まちづくりに関わる団体・企業・人、観光客・来訪者に関わるデータ、地域からの情報発信についてもあらかじめ把握するようにした。

フィールドワークでは事前に話し合っで決めたルートに沿って歩いて観察をし、メモおよび記録用と情報発信素材用として写真撮影を行う。これにより、事前には得られないような、実際に歩くことによって得られる情報、所要時間や目印、歩きやすさ、観光資源となりうるかなどに注目してフィールドノーツを作成する⁽⁵⁾。フィールドワークを行なった次の回の授業では、事後調査報告として、調査結果を報告する。これを4回繰り返して4エリアを調査し、全体の調査結果としてまとめ、地域全体の観光案内とまち歩きモデルコースを作成する。ここでは撮影した写真を素材として使用し、施設の住所、アクセス、料金、営業時間などの基本情報、歴史的背景、そのスポットの魅力などを記述した。また訪れる季節や時間帯、まち歩きにかかる時間、観光客の年齢層などをそれぞれ設定し、それによって紅葉や夜景を含めるか、訪れる飲食店をどこにするかなどを変えたモデルコースの作成を行った。これは印刷メディア（紙メディア）で観光パンフレットのような形で作成した。

こうした授業を行うことにより、フィールドワークを行う前は参加者全員がほぼ知識のなかった地域について非常に深い理解を得ることができ、また季節、時間帯、かけられる時間、観光客の年齢層によっても観光まち歩きのあり方がまったく異なってくるという理解も得られたと言える。また観光パンフレットのような形でガイドとモデルコースを作成することによっ

て、観光情報の発信の方法についても実践的に理解することができたのではないかと考えられる。情報発信に関する大きな課題としては、印刷メディアだけでなくウェブページなどデジタルメディアでの情報発信も視野に入れた授業設計を行うことが挙げられる。また授業を履修している学生によって使用するソフトウェアについての知識、操作技術、デザインについての知識などが異なっており、達成度や効果に大きな差が出る可能性もあるため、そうした知識や技術をあらかじめ身につけられる別の授業や機会を設けておくことも必要であろう。

4. 終わりに

本稿では、観光教育におけるアクティブラーニングの意味とその実践方法について見てきた。大学教育全般においてアクティブラーニングが求められる中で、特に観光教育はその研究対象である観光という分野の特徴からも、アクティブラーニングの意味と効果が期待されると言える。特に教室の授業内で行われるアクティブラーニングだけでなく、観光地、観光産業といった多様な観光の現場での実態を理解するために、直接現地に訪れて行うフィールドワークやプロジェクト活動は重要であり、現在、多くの観光教育においてそうした取り組みが行われている。またさらに、観光地の活性化等にとっては観光情報の発信も重要であり、フィールドワークによって得られた情報を発信するための加工編集もアクティブラーニングのひとつとして実施することが観光教育には求められていると言える。本稿では観光分野におけるアクティブラーニングの実践例として、「観光文化実践」という授業の取り組みを取り上げた。

さまざまな方法で実施されている観光教育におけるアクティブラーニングであるが、フィールドワークを行う場合にはそのフィールドについてだけでなくフィールドワークの方法についての知識が必要であり、観光情報の発信のための加工編集を行うためには情報の加工編集技術の習得が必要となってくる。つまり、効果的なアクティブラーニングの実施のためには、単一の授業内ではなく事前にある程度の方法や技術を習得するための機会を設けることがよいと思われる。そうした授業間の連携をどのようにとるかも、より効果的なアクティブラーニング実施の課題であるだろう。

注

- (1) 本稿は平成30年度川村学園女子大学教育研究奨励費研究「観光分野におけるアクティブラーニング教育」の研究成果の一部である。

- (2) 観光文化実践におけるアクティブラーニングについての調査質問項目と選択肢は以下の通りである。またこの他に学生の反応や目標の達成度など、気づいたこと等の自由記述の項目も設けた。
1. 観光文化実践の中で行なっていることは何ですか（複数回答可）
 - a フィールドワーク
 - b 地図・パンフレット・ウェブページ等の作成
 - c 商品開発体験
 - d その他（具体的に）
 2. (1. で a フィールドワークと回答した方に質問です)
フィールドワークの結果をどのようにまとめさせていますか（複数回答可）
 - a レポート
 - b プレゼンテーション
 - c 製作物（地図・観光ガイド・パンフレット等）
 - d その他（具体的に）
 3. (レポート、プレゼンテーション、地図・パンフレット等の作成をさせている方に質問です)
作成の際に使用する PC ソフトウェア（アプリケーション）を指定していますか
 - a 指定している（具体的に）
 - b 指定していない
- (3) 具体的な内容を把握する目的の質問調査であるため統計の数値はあくまでも参考であり、対象とする授業は 2018 年度または 2019 年度のもの、また複数回答可としたため全体の数値は年間の開講クラス数より多くなっている。
- (4) ここで取り上げる例は必ずしも各クラスに共通しているわけではなく、代表的なものでもない。
- (5) フィールドノートとは調査日誌のことであり、観察した事実とフィールドワーカー自身の印象や感じたことなどを記録しておくものである（佐藤，2006）。

参考文献

- 中央教育審議会，2012，「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(文部科学省 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)。)
- Emerson, R.M., Frets, R.I., Shaw, L.L. 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, University of Chicago Press. =1998, 佐藤郁哉, 好井裕明, 山田富秋訳『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで—』, 新曜社。
- 遠藤英樹，2005，「観光という『イメージの織物』—奈良を事例とした考察—」, 『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み—』, 明石書店。
- 山地弘起，2014，「アクティブ・ラーニングとはなにか（特集 アクティブ・ラーニングの実質化に向けて）」『大学教育と情報』, 2014 年度 (1), pp. 2-7.
- 中島智, 井口貢, 2013, 「大学の観光教育における PBL の位置づけと活用：『共歓』という視座の可能性」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』, (4), pp. 21-32.
- 国土交通省観光庁観光産業課，2018，「観光教育に関する実態調査報告書」(国土交通省 <https://www>。)

観光教育実践におけるアクティブラーニング

mlit.go.jp/common/001293058.pdf).

佐藤郁哉, 2002, 『組織と経営について知るための実践フィールドワーク入門』, 有斐閣.

佐藤郁哉, 2006, 『フィールドワーク一書を持って街へ出ようー』(増訂版), 新曜社.